

“Transitivity” とは何か?

——ムンダ語に於ける自動詞 vs. 他動詞の弁別性に見る「文法の範疇概念」とその体系性——

藤井 文男

Abstract

A multi-fold grammatical relationship between both types of linguistic expressions, lexical items and grammatical categories, is discussed as to the semantic notion of “transitivity”. Traditionally, the grammar of a natural language has been conceived of as consisting of the two types of expressions mentioned above. It is very often the case that transitivity is fairly little marked morphologically on lexical items even though it is well known that this notion plays an important role in a series of syntactic processes.

As against other major languages, however, Mundari, a minority language of India, which is said to belong to the Austro-Asiatic Family, shows a firm morphological system of representing the semantic status of verbal lexemes as for “transitivity” so that this notion could be treated as a kind of grammatical category. The present paper argues that investigations into (small) languages of the type like Mundari with rich morphological complexity referring directly to the semantic construction within lexical items are much promising to clarify the human view into the world outside the language, since lexical items might be conceived of as corresponding to objects/notion and “facts” in the world.

1. 「語彙」と「文法範疇」

1.1. 「語彙」とその特質 古典的な「伝統文法」以来、現代言語学でも“学派”を越えて一般に受け入れられている、「時制」や「格」といった代表的“文法のカテゴリー”は通常、その下位区分（「サブ・カテゴリー」）として複数の“値”を示すのが普通だ。¹⁾このことは“Grammatical Relations”や“Discourse Strategy”といった比較的新しく議論の俎上に上るようになった、伝統的な「文法範疇」よりは若干、理論的定義がゆるやかな概念を主たる対象として、多くの場合この記述レベル自体は「ディメンジョン」、下位区分の方を「カテゴリー」と呼称する記述的枠組みにあっても、基本的には同様である。

こうした“構造化された”カテゴリーに対する認識で重要なのは、いわゆる「構造主義的ターミノロジー」では、具体的に例えば Lat. *amicus* “「男友達」の主格形”と Lat. *amicum* “「男友達」の対格形”のように、形態的にも語形が明らかに異なっていて、²⁾「正書法」的には“別表現”もしくは“別単語”と解釈するしかないペアであっても、「形態論」的には“ひとつの形態素の示す二種類の「異形態」”と捉える、という点だ。卑近な言い方をすれば逆に、「語形に違いがあるにも拘らず、*amicus* と *amicum* の持つ“意味上”の対立を、我々は分析的に認識することができない」ということなのである。³⁾このことは、いわゆる「文法のカ

「語彙」と捉えられる言語表現の示す体系的な特質であり、本稿で取り上げることになる、「語彙」に位置付けられる言語表現と本質的に異なる、大きな特徴でもある。

1.2. “Transitivity” と統語論 “Parts of Speech” @としての「品詞」のひとつである動詞語彙の下位区分に、「自動詞」と「他動詞」というグループがある。ある意味で極めて“伝統的”な technical terms で、英語や日本語に限らず、ありとあらゆる語学教育の場に於いて当該言語の記述に供される、いわゆる「学校文法」でもほとんど例外なく取り上げられるカテゴリーであり、初学者にとっても「最も馴染み深い概念のひとつ」と言っている。

語学教育の現場ではしかし、両者の“意味構造上”の本質的差異については当然ながら、分析的に明示されることはほとんどない。⁴⁾ 語彙のレベルに於いては、「自動詞」と「他動詞」の対立は既に「意味的」に言わば“自明の理”であり、言語現象を分析するに際して“semantic criteria”を“学術的解釈”の判断基準とすることもしばしば行なわれるほどだ。⁵⁾ そして実際、こうした“意味論的直感”は、例えば:

- (1) a. Eng. John *sleeps* (eight hours a day).
- b. Eng. ?John *sleeps a book*.
- c. Eng. ?John *kills* (eight hours a day).
- d. Eng. John *kills one person* a day.

のように、たとえ自動詞と他動詞の対立が語彙表現上で形態的にマークされないにしても、「自動詞は目的語となる名詞表現を欠く」のに対して「他動詞はこれを従える」という具合に、統語論的な対立としては形式的にも明確に現われる、という言語事実により説得力を持って“傍証される”ことになる。

実際、例えば英語の *to open* のような自動詞と他動詞の両方の用法を持つ動詞では唯一、目的語として機能する名詞表現の有無のみが両方の語彙を構造的に弁別する手段となっている現象に於いて、語彙表現自体に形態的対立はなくとも「自動詞」と「他動詞」はある意味では「文法のカテゴリー」としても明確に対立している、という事実が凝縮して現われるのである:

- (2) a. Eng. **The door opens** ϕ . (“intransitive”)
- b. Eng. John *opens the door*. (“transitive”)

ここで、「ドアが開く」という事態そのものはおそらく、*to open* という形態の自動詞・他動詞どちらの意味要素としても共通する、と理解していいと思われる。意味論的にはだから、違いは唯一、(2b)に於ける *John* の“Agent”としての存在、ということになる (cf. FILLMORE

“transitivity”に関して対立する二つの動詞表現は、もはや「ひとつの語彙の異形態」という理解はできなくなってしまうのである。要するに、語彙表現に対しては「文法のカテゴリー」と関連させた分析を施すのは理論的にも相当に困難、ということなのだ。

上でも触れたように、「世界の切り取り方」を最も直接的な形で体現するのが語彙である以上、我々言語使用者が直感的に認識できる「意味的対立」を体現する二つの表現を“別語彙”と捉えてしまうのは、この位置付けになる言語表現にとっては恐らく“運命”なのだと思う。理論的には両者が如何に明白な「ミニマル・ペア」を形成しようが、普通の言語使用者には上位概念としての“形態素”もしくは“語彙素”といった記述レベルなど想起できず、同じ“語幹”を持つ「自動詞」と「他動詞」のように、いくら意味的に両者が“密接”に関連していようと、やはり別語彙との判断になってしまうのであって、このことは上掲の英語で *to open* が自動詞と他動詞の両項目にダブルエントリーされていることから一目瞭然であろう。

1.4. “Transitivity” をマークする Ablaut このように、ある意味では典型的に「文法のカテゴリー」と位置付けられるはずの“Transitivity”も、通常はこれが動詞語彙で体現されるという実態から、[±transitive] という対立は「単一の形態素に属す二種類の allomorphs」という位置付けとはならず、認識上では「互いに“無関係”な二つの語彙」と捉えられてしまうのが一般的であり、このこと自体は本稿が取り上げる現代ムンダ語（ナグリ方言）でも基本的に変わりはない。

しかしながら、既に藤井 (2010) でも示したように、ムンダ語は上で取り上げた“transitivity”の対立を形態的にも明確な形で典型的「文法のカテゴリー」として体現する：

- (6) a. Mnd. Mangra *senog kan-a -e.* ‘Mangra **has** gone.’ (cf. 6b)
 Mangra rice go/eat RES-IND-3SG
 b. Mnd. Mangra manzdi *jom kad-a -e.* ‘Mangra **has** eaten rice.’ (cf. 6a)

ムンダ語は更に、*kan-* vs. *kad-* のような“助動詞”のみならず：

- (7) a. Mnd. Mangra Ranci *sen -oq -φ -e.* ‘Mangra **would** go to Ranchi.’ (cf. 7b)
 b. Mnd. Mangra manzdi *jom -eq -φ -e.* ‘Mangra **would** eat rice.’ (cf. 7a)

(7a-b) のように、動詞語彙自体が形態的に [±transitive] をマークするという、極めて特徴的な特質をも併せ持つのである。ここで、*-oq* vs. *-eq* が示す（形態上の）対立は狭義の語彙が既に「意味的要素」として内包する“意味構造上”の対立を補完的に明示する「(単一の) 形態素“Transitivity”」の持つ二種類の“値” [±transitive] であり、しかも *sen-oq-e* “he/she would

go” や *jom-eq-e* “he/she would eat” はどちらも「一語」としてこれ以上の形態的分析は受け付けないことから、仮に Eng. *to open* のような「自動詞」と「他動詞」(の語幹) が homophone となるような語彙の場合、両者は基本的に *-oq* vs. *-eq* という形態的な標示でしか語彙的な対立を区分できない、という状況が想定されることとなる。そうなるとすれば、少なくとも“transitivity”に関して「動詞」という品詞は、一方では「語彙」の位置付けにありながら、他方で同時に「文法のカテゴリー」としての属性も併せ持つ言語表現ということになって、“transitivity”の概念自体、改めてその実態を問い直す必要性も生じてこよう。

以下では、現代ムンダ語(ナグリ方言)の動詞語彙表現が文中で用いられる定形に対して形態的に標示される“transitivity”に関するマーキングの分析を通し:

- (8) a. ムンダ語に於ける“transitivity”は「文法のカテゴリー」として位置付けられる。
- b. ムンダ語に於る動詞語彙自体は“transitivity”に関して基本的に neutral であり、“全て”の動詞語彙に *-o(q)/-e(q)* が接辞することで“transitivity”が確定する。

といった諸点を明らかにすることで、これまでは“不可解”にしか映らなかった統辞現象を構造的に整理し、更には「文法のカテゴリー」としての“transitivity”の相対性を浮き彫りにするための基盤を構築したい。

2. ムンダ語に於ける、「文法のカテゴリー」としての“Transitivity”

現代ムンダ語(ナグリ方言)の文法が如何なる統辞的特質を持つかを浮き彫りにするため、“典型的”な自動詞語彙と他動詞語彙を対比させることを通し、まずは両者の差異を形態上から探ってみることとする。

2.1. 動詞語彙とその“Transitivity” Technical term としての“transitivity”の概念に対する厳密な定義は最終的には避けて通ることのできない問題ではあるが、前節でも取り上げた「語彙表現」に内在する意味構造上のある種の“普遍性”を作業仮說的に前提として、ムンダ語に関しても“典型的「自動詞」”および“典型的「他動詞」”が文中で如何なる形態的特性を示すかに焦点を当てて規則性を探ってみたい:

- (9) a. Mangra naqa ϕ *senog-a* *-e*. ‘Mangra is about to go.’ (cf. 9b)
- b. Mangra naqa manzdi *jom* *-a* *-e*. ‘Mangra is about to eat rice.’ (cf. 9a)
- Mangra now rice eat -IND-3SG

前節でも具体例を示した英語などへの類推から予想できるように、ムンダ語に於いてもいわゆる「典型的な自動詞」である *senog* ‘to go’ は目的語として機能する名詞表現を欠く点でやはり「典型的な他動詞」である *jom* ‘to eat’ などとは統語的特性を異にするものの、動詞語幹（動詞語彙本体）に「直說法」をマークする *-a* が続き、一般的にはこれに加えて主語と一致する「人称語尾」、ここでは三人称単数の *-e* が後続するという共通の形態的オペレーションが施されるだけで、“transitivity” をマークする何らかの接辞が用いられることはない。⁹⁾

ただし、他動詞構造に於いて目的語が [+animate] を示す場合、動詞語彙の形態的特性は [-animate] の時と大きく異なり、新たな接辞が登場する。いわゆる “Object Agreement” - であり (cf. 藤井 2009)、原則として動詞語幹と法のマーカーとの間に接中辞が付加される形となる:

- (10) a. *Mangra* **manzdi** *jom- ϕ -a-e*. ‘Mangra will eat **rice**.’
 b. *Mangra* (*minyad*) **sim-ke** *jom-i -a-e*. ‘Mangra will eat (*a*) **chicken**.’
 c. *Mangra* **bariya** **sim-ke** *jom-kin-a-e*. ‘Mangra will eat **two chickens**.’
 d. *Mangra* **moriya** **sim-ke** *jom-ko -a-e*. ‘Mangra will eat **three chickens**.’

このように、ムンダ語では “object agreement” も対象となる目的語が [+animate] の属性を示す場合に限って発動され、接辞は目的語の人称と文法上の数によって活用するが、これは当然ながら他動詞構造に限定して観察される現象である。ただ、この接辞はあくまでも目的語の示す属性に連動したものであり、直接的に “transitivity” をマークするもの」とまでは判断できまい。仮にこうした接辞が “transitivity” のマーキングであるとするなら、形式的には一応、他動詞構造をとっている (10a) のような、“object agreement” を欠く場合であっても何らかの接辞が現われ、自動詞語彙とは形態的にも対立させる表示法をとるはずだからである。¹⁰⁾

2.2. “Transitivity” を形態的にマークする時制・アスペクト助動詞 より重要なのは、特に時制やアスペクトの “助動詞” を用いる場合、典型的には当該助動詞の語幹末尾が *-n-* vs. *-d-* という対立を示す現象である:

- (11) a. *Mangra* *senog* **kan**-a -e. ‘Mangra **has gone**.’ (cf. 9a)
 b. *Mangra* *manzdi* *jom* **kad**-a -e. ‘Mangra **has eaten** rice.’ (cf. 9b)
 Mangra *rice* *eat* RES-IND-3SG

語彙表現が “意味構造上”、既に [±transitive] の対立を内包しているなら redundant と言ってしまうが、*-n-* が [+transitive] を、そして *-d-* は [-transitive] をそれぞれマークしているのは

動詞の形態が *kan-* となり、他動詞構造では必ず *kad-* (もしくは三人称単数で *kaj-*) の形をとることから、その時点で完全に *disambiguate* されるわけだ。¹²⁾

更に、*senog* ‘to go’ のような自動詞が主語以外の名詞表現をとり、“goal”として機能させることである種「広義の他動詞構造」を示すような場合であっても、動詞語彙の意味構造が他動詞と認識されない限り、問題の助動詞は *kan-* の形態に留まって *kad-* とはなり得ない:

- (15) a. Mangra ϕ **senog** *kanae*. ‘Mangra has **gone**.’ (cf. 15b)
 b. Mangra *Ranci* **senog** *kanae*. ‘Mangra has **gone** to *Ranchi*.’ (cf. 15a)
 c. *Mangra *Ranci* **senog** *kadae*. (‘Mangra has **gone** to *Ranchi*.’ [cf. 15a-b])

言うまでもないが、(15b) もしくは (15c) に於いて、助動詞の定形である *kanae* や *kadae* が擬似的目的語として機能している観のある *Ranchi* (“goal”を標示する地名)¹³⁾ と一致するようなことはない。

ここまで述べてきたことを総ずるに、ムンダ語に於ける“transitivity”は例えば英語のような「統語論的な概念ではない」ことから、目的語として機能する名詞表現の有無に依存せず:

- (16) a. Eng. **The door** has open-ed. ([to *open*]; cf. 16b, 17a, 18a)
 b. Eng. John has open-ed **the door**. ([to *open*]; cf. 16a, 17b, 18b)

同様に、ドイツ語のように他動詞を再帰的に用いることで自動詞の内容が表現できるような“融通性”も示さず:

- (17) a. Ger. **Die Tür** hat **sich** ge-*öffne*-t. ([*sich öffne-n*]; cf. 17b, 16a, 18a)
 b. Ger. Hans hat **die Tür** ge-*öffne*-t. ([*öffne-n*]; cf. 17a, 16b, 18b)

要するに、語彙表現独自の“意味構造”を持っていて、その中の一要素が [±transitive] の対立に連動している、と解釈しなければならないことになる。

また、少なくともここまで検証してきた限りでは、例えば具体的には (14a-c) の *goj* ‘to die, to kill’ のように、対応する「自動詞」と「他動詞」の関係に何らかの規則的な派生のメカニズムが働いているようにも見えず、両者を homophone のままにしておく点など、ある程度はそうしたメカニズムが分析可能な言語とも異なっている印象を与えることも確かだ:

- (18) a. Jap. **Doa-ga** *a[k]i*-ta. ([*ak-u*]; cf. 18b, 16a, 17a)
 b. Jap. *Taroo-ga* **doa-o** *ake*-ta. ([*ake-r-u*]; cf. 18a, 16b, 17b)

しかしだからと言って、ムンダ語の“transitivity”を完全に「語彙化」された概念と理解することもできまい。時制・アスペクトの助動詞などを使った途端、[±transitive]の対立の形態的標示が必須となり、しかもそのマーキングが紛れるような事態は絶対に発生し得ないことから、ムンダ語に於ける“transitivity”もその意味では構造的に担保された「文法のカテゴリー」だと認めないわけにはいかないのである：

- (19) a. *Mangra Ranci **senog** kadae. ('Mangra has **gone** to Ranchi.')
- b. *Mangra ϕ **jom** kanae. ('Mangra has **eaten something.**')
 c. Mangra ϕ **jom** kadae. 'Mangra has **eaten something.**'

要するに、ムンダ語の“transitivity”は「語彙に根付いた文法のカテゴリー」という位置付けになるのだ。

2.3. “Transitivity” とその “相対性” 根本的な属性として「相対的」である文法のカテゴリーが語彙的な“意味構造”に入り込んでいるという実態は、語彙でありながらも極めて相対性の高い表現を許容することに繋がる。実際、英語や日本語では「自動詞」としか理解できないような Eng. *to cry* に相当する Mnd. *raqa* は実際、その“意味構造”を構成する要素としてあろうことか [+transitive] を示すのである：

- (20) a. *Mangra ϕ *raqa* kanae. ('Mangra has *cried.*')
 b. Mangra ϕ *raqa* kadae. 'Mangra has *cried.*'

通常認識に従えば、「泣く」という行為もしくはプロセスは、どう考えても“自己完結型”の「自動詞」としか解釈のしようがないにも拘らず、“resultative”をマークする助動詞としては *kan-* ではなくして *kad-* を要求する。この形態は「典型的」には他動詞に連動する接辞 *-d* を含んでおり、ムンダ語はつまり *raqa* ‘to cry’ を「他動詞」と位置付けていることになるのである。

3. ムンダ語に於ける “Transitivity” とその「体系性」

前節では“transitivity”に関する対立を形態的に標示する“助動詞”として resultative のマーカー *kan-/kad-* を取り上げたが、同じ対立を示す助動詞にはこれ以外にも数種を数える。以下でその内の幾つかを例示してみたい。

3.1. 時制・アスペクト助動詞と“Transitivity” 先ずは，“terminative”をマークする *len-/laq-* である:

- (21) a. Mangra hola Ranci *senog len* -a -e. ‘Mangra *went* to Ranchi yest.’ (cf. 2a)
 b. Mangra hola manzdi *jom laq* -a -e. ‘Mangra *ate* rice yesterday.’ (cf. 2b)
 (c. Hsd. M. hola manzdi *jom led* -a -e. ‘Mangra *ate* rice yesterday.’ [cf. 21a-b])
Mangra yest. R./rice go/eat TER-IND-3SG

前節で取り上げた resultative は [±transitive] の対立を *-n-* vs. *-d-* で示していたが, terminative の場合はそれが *-n-* vs. *-q-* となる点, 若干の異動がある。とは言え, [+transitive] をマークする *-q-* は現実の音価は単純な glottal stop [ʔ] で *-d-* が脱落しただけと考えられ, ナグリ方言の近隣で行なわれているハサダ方言では予想される *-d-* がそのまま現われるわけだから (cf. 21c), “transitivity” に関する terminative の形態的挙動も完全に resultative の場合とパラレルだと考えていい。両者の形態的対立が厳格に守られることも同様である。

次の例は“preterite”をマークする *ken-/ked-* だ。¹⁴⁾ ここでは [±transitive] の対立を予想通りの *-n-* vs. *-d-* で示す:

- (22) a. Mangra hola Ranci *senog ken* -a -e. ‘Mangra *went* to Ranchi yest.’ (cf. 22b)
 b. Mangra hola manzdi *jom ked* -a -e. ‘Mangra *ate* rice yesterday.’ (cf. 22a)
Mangra yest. R./rice go/eat PRT-IND-3SG

(22a-b) から明らかなように, 語順や分要素など, 動詞語彙 *senog/jom* を巡るコンテキストは基本的にどちらも同じで, preterite のマーカーが *ken-* vs. *ked-* との形態的対立を示すのは偏に動詞語彙の内部“意味構造”の差異に対応したものと考えざるを得ないのである。

次の, “Ingressive”をマークする助動詞はしかし, 若干の不規則性を伴う。現代ムンダ語に於いては, [+transitive] に対応するはずの *jad-* は実際には使われないからだ:

- (23) a. Mangra hola Ranci *senog jan* -a -e. ‘Mangra *went* to Ranchi yest.’ (cf. 23b)
 b. *Mangra hola manzdi *jom jad* -a -e. (‘Mangra *ate* rice yesterday.’ [cf. 23a])
 (c. Hsd. M. hola manzdi *jom jad* -a -e. ‘Mangra *ate* rice yesterday.’ [cf. 23a])
Mangra yest. R./rice go/eat ING-IND-3SG

ただし, ここでも同系のハサダ方言は *jad-* の形態を許容し, *-n-* vs. *-d-* という構造的対立が確認できる。¹⁵⁾

次に取り上げる時制・アスペクトの“助動詞”は, いわゆる「現在進行形」に相当する

“present continuous” で, [±transitive] の対立は *tan-* vs. *lad-* で示される:

- (24) a. Mangra naqa Ranci *senog tan* -a -e. ‘Mangra is going to Ranchi.’ (cf. 24b)
 b. Mangra naqa manzdi *jom lad* -a -e. ‘Mangra is eating rice.’ (cf. 24a)
 Mangra now R./rice go/eat DUR-IND-3SG

先の “ingressive” の場合と同様, 助動詞の語幹に共通性を欠く, という irregularity は認められるものの, 肝心の [±transitive] の対立に関しては *-n-* vs. *-d-* という形態素の交替にブレは一切なく, 極めて規則的に動詞語彙の “意味構造” に於ける内部対立を映し出している, と見えよう。

3.2. “Transitivity” と Ablaut によるマーキング より重要なのはしかし, 動詞語彙のレベルに於ける “意味構造” 内部の [±transitive] の対立を顕在化させる形態的手段は *-n-* vs. *-d-* に限定されるものではない, という言語事実である。次の例は「アスペクトや時制をマークする助動詞」と言うより, むしろ「話法の助動詞」とも呼ぶべき表現である (OBL: “Obligative”):

- (25) a. Mangra Ranci *senog ko* -a -e. ‘Mangra shall go to Ranchi.’ (cf. 25b)
 b. Mangra manzdi *jom ke* -a -e. ‘Mangra shall eat rice.’ (cf. 25a)
 Mangra R./rice go/eat OBL -IND -3SG

この助動詞の最大の特徴は, [±transitive] の標示を上で取り上げた時制・アスペクト系の助動詞と違って *-n-* vs. *-d-* という子音の対立ではなく, *-o-* vs. *-e-* という語根母音の対立で示す点にある。¹⁶⁾ そして実際, この助動詞は同機能を担う先の語幹末子音 *-n/-d* を更に受け入れることはしないのである (cf. **kon-/ *kod-*; **ken-/ *ked-*)。

以上, 「行く/歩く」や「食べる」といった, ある意味では “典型的” とも言える, それぞれ自動詞や他動詞を例に, 動詞語彙の “意味構造” に位置づけられた [±transitive] がムンダ語に於いてどのようにして顕在化されるか, その統辞的メカニズムを検証し, ナグリ方言では時制・アスペクトをマークする助動詞に “接辞される” 形態素としての *-n* vs. *-d* および当該助動詞の語根母音を交替させる *-e-* vs. *-o-* という, 二種類のメカニズムを特定した。両者が排他的に用いられることも領けるところである。

3.3. いわゆる「非人称表現」と “Transitivity” ムンダ語にもしかし, 動詞語彙としてはそうした内部的意味構造が必ずしも “自明” とは言えない表現も存在する。そうした語彙表現は, “transitivity” に於けるどのように扱われるのか? あるいは英語の *to open* のように, 統語

的に「自動詞」としても「他動詞」としても如何ようにも使えそうな語彙も考えられるが、そうした問題はどうか?

これと関連し、いわゆる「非人称表現」と理解できる構文では次のような現象が観察されるが、この事態はどのように解釈したらいいのか? 「非人称表現」の全体像についてここで詳しくは取り上げられないが (cf. 藤井 2010) :

- (26) a. *Mangra-ke gapa urui-y -a -φ*. ‘Mangra will *get ill* tomorrow.’ (cf. 27a)
 b. *Mangra gapa urui-o -a -e*. ‘Mangra will *get ill* tomorrow.’ (cf. 27b)
Mangra tomorrow sick-INT-IND-3SG

(26a) がいわゆる「非人称表現」として (26b) のような“通常”の「人称表現」と対立する構文で、動詞語幹 *urui* に *-i* (ここでは *-y*)¹⁷⁾ が接辞され、これが文頭の *Mangra* と“一致”して更に目的語をマークする *-ke* を伴っていることから判るように、*urui* はそれ自体、動詞語彙としては構文法上からすれば他動詞である。しかしこれが、(26b) では *urui-o* と“変化”して全体が「人称表現」となり、文頭の *Mangra* は動詞末尾の *-e* と一致する。ここには既に目的語はなく、一致する対象を欠いた動詞語幹末の *-o* を“agreement marker”と理解することは到底できまい。だとすれば、この *-o* は構造上、どう位置づけたらいいのか?

上で示したように、動詞語根 *urui* を全体として「他動詞」と捉え、しかも (26b) が“通常”の「人称表現」なのだから、*urui-o* は「自動詞」となるはずで、だとしたら *-o* は「他動詞から自動詞を導く“intransitiver”」と解釈するしかないのではあるまいか? 要するに、*-o* の接辞は「造語法上のメカニズム」となっている、ということなのである。そして実際、日本語や英語では普通「形容詞」(つまり、そもそもが自動詞)と解釈されるものの、ムンダ語ではそのまま「非人称表現」で用いられることから形式的には「他動詞」と理解しなければならない動詞語彙の多くが *-o* を伴わないと「人称表現」共起できないことから、*-o* を「自動詞化の接辞」と理解するのは妥当なことと思われる。

3.4. “造語法メカニズム”としての Ablaut 問題をこの視座から理解すると、ここで新たに別の問題が浮かび上がってくる。それは、少なくとも一部の語彙表現に、*-o* を接辞しない時、要するに他動詞の用法の場合、例えば“indicative”をマークする法の接辞 *-a*などを付加することができない、というものだ。次の例を見て欲しい:

- (27) a. *Mangra gapa maila -o -a -e*. ‘Mangra will *get dirty* tomorrow.’ (cf. 27b)
 b. **Mangra gapa maila -φ -a -e*. (‘Mangra will *make dirty* tomorrow.’ [cf. 27a])
 c. *Mangra gapa maila -e -a -e*. ‘Mangra will *make dirty* tomorrow.’ (cf. 27a)
Mangra tomorrow be:dirty-I/T-IND-3SG

(27a) の *maila* に *-o* を付加し, *maila-o* の形態で自動詞が導かれることで, 主語の *Mangra* に対する陳述を行なう「人称表現」としての構文になっているのは上述したことから容易に理解できるはずだが, だとしたら *maila* 自体は文法的には他動詞のはずだから, そのままの形態で, 例えば (27b) のような構文で “to make (something) dirty” の意味で使えると考えられるのに, (27b) は非文法的となってしまう。これを文法的に適った文表現とするためには, *maila* という動詞語彙に対し, (27c) のように更に *-e* を接辞してやらないとマズいのだが, この *-e* とはそもそも何者なのか?

慣れないと, この *-e* を *-i* と聞き違い, [+animate] を示す三人称単数の目的語と一致する, agreement marker と理解してしまいがちだが, (27c) ではやはり表現されてはいないものの, 目的語としては非生物を対象としていて, 文全体の意味は上で示したように “Mangra will make something dirty tomorrow.” となる。要するに, (27c) の動詞語彙 *maila* に接辞されているのは「一致の接辞」なのではなく, もちろん「自動詞を導く接辞」でもないのだ。では, この *-e* の正体は一体, 何なのか?

(27c) が他動詞構造をとっていること自体は確かである。だとしたら, 問題の *-e* は単純に “transitive marker” と位置付けたらいいのではないだろうか?あるいは, 動詞語幹そのものは “transitivity” に対して neutral であり, *-e* を伴って初めて「他動詞」たり得る...つまり, *-e* は言わば “transitiver” なのだ。そして結局, この *-e* は “intransitiver” としてやはり *maila* に接辞されていた *-o* と直接, 対立するのである。

こう考えて, ハッと気が付くことがある。既に上で取り上げた「話法の助動詞」としての *ko-a-* と *ke-a-* の対立である。(27a-c) に於ける *-o* と *-e* の分布もだから, 実際のところは単に [±transitive] を体現するための, いわゆる “Ablaut” 現象に過ぎないのではないだろうか?つまり, *maila* ‘dirty’ という語彙表現自体は意味論的 “内部構造” に [±transitive] が含まれておらず, *-o* もしくは *-e* の接辞を伴ってようやく「自動詞」あるいは「他動詞」たり得る, という解釈である。

3.5. 自動詞化接辞 *-oq* と *-og* による “究極” の Lexicalisation この解釈を踏まえて初めて理解可能となる現象がある。それは, (動詞語幹が子音でおわることから) 語幹に直接, 接辞することのできる, 例えば直説法のマーカーである *-a* に, ある意味で “不必要” な *-e* (もしくは *-eq*) が先行することがある, という言語事実だ:

- (28) a. Mangra manzdi *jom-φ* -a-e. ‘Mangra will eat rice.’ (cf. 28b)
 b. Mangra manzdi *jom-e(q)*-a-e. ‘Mangra will eat rice.’ (cf. 28a)

(28a) と (28b) は基本的に同義である。ただ, 上で見てきたことを踏まえれば, (28b) に於ける動詞表現 *jom* ‘to eat’ 接辞された *-e(q)* は, 確かに「*jom* ‘to eat’ 自体, “意味構造” からして

他動詞であることは自明」ではあるにしても、そうした意味論的属性を更に形態的にも顕在化させるための「他動詞マーカ―」だと解釈していいのではないだろうか？

もしこの解釈が妥当なのであれば、逆に「意味論的“内部構造”からして自動詞であることが“自明”」とされる、例えば *senog* ‘to go’ などには形態的「自動詞マーカ―」の *-o* が接辞されることもあり得る、という理論的予想が立つことになる：

- (29) a. Mangra Ranci *senog* -a-e. ‘Mangra will go to Ranchi.’ (cf. 29b-c)
 b. Mangra Ranci *sen* -a-e. ‘Mangra will go to Ranchi.’ (cf. 29a, c)
 c. Mangra Ranci *sen -o(q)*-a-e. ‘Mangra will go to Ranchi.’ (cf. 29a-b)

残念ながら、*sonog* ‘to go’ に対して「自動詞マーカ―」の *-o* を接辞し、**senog-o* とすることはできない。しかし、*senog* には synonymous な *sen* という形態がある (cf. 29b)。そして、この *sen* ‘to go’ に対してであれば *-o* を接辞して *sen-o(q)*- とすることは可能なのであって、我々の理論的予想は見事に的中するのだ。

繰り返しになるが、確かに *senog-o(q)* は非文法的である。しかし、*sen* ‘to go’ の語彙的バリエーションとして本稿では当初から引用している *senog* ‘to go’ という形態自体、*sen* ‘to go’ という“基本形”に「自動詞マーカ―」が形態的に接辞された *sen-oq* が lexicalise されて成立した（自動詞）語彙なのだ。このことは音韻的にも、[-q] と [-g] が対立せず、単一の音素 /-g/ の allophones となっていることから領けるし、例えば本来は“transitivity”に関して homophone である *goj* ‘to die, to kill’ が時制・アスペクトの助動詞の関係で統辞論的に disambiguate できないような時、自動詞分だけ *gojog* という形態を取ることも逐一、納得できる。この *gojog* ‘to die’ という意味の自動詞も、[±transitive] が特定できない *goj* に対して「自動詞マーカ―」である *-o(q)* が形態的に接辞した上で更にそれが lexicalise された結果として成立した語彙に過ぎないのである。

3.6. “In-/Transitivity” をマークする *-oq/-eg* とその必須性 こうした認識を踏まえることでその背景に初めて合点のいく、数々の現象がムンダ語には幾つか存在する。そのひとつが、いわゆる「接続法」を対応する直説法から導く際の文法的オペレーションである。¹⁸⁾ 例えば、*jom* ‘to eat’ はその直説法を、既に上でも暗示してきたように、語幹に“indicative marker”である *-a* を接辞することによって導くが、対応する接続法の形態は単純に、当該接辞を脱落すれば済む。ただし、直説法のマーカ―である *-a* によって弱化されて聞こえにくくなっていた glottal stop が“復活”し、実際の接続法形は *jom-eg* ‘would eat’ となる。問題はこの glottal stop を支える核母音の *-e-* だが、例えば同じ *jom* ‘to eat’ に emphatic marker の *-gi-* を接辞して *jom-gi-* とすると、その接続法形は *jom-gi-q* となって問題の核母音は脱落する、と考えられる。要するに、この母音自体は一種の euphone に過ぎず、核心は偏に glottal stop /-q/ を復

活させることにこそある、と判断していいわけだ。

ある回のフィールドワークを実施中、*kus* ‘to be happy’ という動詞の接続法形を割り出そうとしたことがある。挨拶表現で英語の *I’m glad to meet you.* に応える時、*Anyho bohut kusany!* ‘I’m very glad, too!’ と言ったりするが、そうした文中で使われる動詞語彙だ。その時はその意味や機能について深く考えずに単純に接続法の形態を確認するだけのつもりだった。この例で言えば、*kusany* ‘I’m happy’ の *-a-* が直説法のマーカーで、*-ny* が一人称単数の人称語尾だから、直説法マーカー *-a-* を脱落させて glottal stop を復活させ、*kuseqny* とすれば事足りるだろう、くらいに単純に考えていた。

しかしながら、私のインフォーマントはこの形態を即座に却下し、「そんな言い方は誰もしない…」と取りつく島もない。あれこれと、可能性のある形態を矢継ぎ早に試してみたが、全て NG で、その時は最後に“奥の手”である *kus-gi-q* を持ち出すことで辛うじてそれなりのデータを確保したが、それですらインフォーマントは不満そうだった。最終的にこれを *kus-gi-any* 直説法形と対比させることでその場は確認が得られたが、私としてはその時点では「*kus* ‘to be happy’ が通常、期待される **kus-eqny* の形態を欠くのは idiosyncrasy」としか理解できなかった。

今から思えばしかし、**kus-eq* が非文法的となるのは「むしろ当然」と言うしかない。復活する glottal stop /-q/ を支えるための *-e* は実は、動詞語彙の“意味構造”に於ける内部属性 [+transitive] を形態的に顕在化するための、いわゆる「他動詞マーカー」だったのだ。いくら *jom* ‘to eat’ で *-eq* によってその接続法形が導けたからと言っても、それは *jom* ‘to eat’ がたまたま（典型的な）他動詞だったからに過ぎず、*-eq* を“subjunctive marker”として一般化するのはまだ十年早かった。何れにしても [-transitive] の内部属性を有する *kus* ‘to be happy’ のような（典型的）自動詞の接続法形を導くには、*-eq* でなく *-oq* を接辞し、*kus-oq* としなければならなかったのである。そして実際、*sen-oq/senog* ‘to go’ と同様、*kus-oq* も期待どおり *kusog* ‘to be happy’ として当然のように“lexicalise”されていることから、*-o(q)* vs. *-e(q)* は [+transitive] を形態的に顕在化させるマーカーとして生産的であることが確認できよう。

ここで改めて整理しておきたい: 例えば（“意味構造”的に他動詞であることが自明な）*jom* ‘to eat’ がある種の「他動詞マーカー」として機能する *-e(q)* を伴った形態のバリエーションを持つと同様、（“意味構造”的に自動詞であることが自明な）*sen-* ‘to go’ などの動詞語彙にもある種の「自動詞マーカー」とも言うべき *-o(q)* が接辞されたバリエーション *sen-o(q)* が存在し、一般に glottal stop が /-g/ で現われる異形態はそのままの形で lexicalise されているケースが多い。従って、次の (30b) のような接辞の方法はあり得ないことになる:

- | | | | |
|---------|-------------------------------------|-----------------------------|--------------|
| (30) a. | <i>Mangra Ranci sen-∅ -a-e.</i> | ‘Mangra will go to Ranchi.’ | (cf. 30b-c) |
| b. | * <i>Mangra Ranci sen-e(q)-a-e.</i> | ‘Mangra will go to Ranchi.’ | (cf. 30a, c) |
| c. | <i>Mangra Ranci sen-o(q)-a-e.</i> | ‘Mangra will go to Ranchi.’ | (cf. 20a-b) |

いわゆる“transitivity”の対立を形態的にマークする接辞として先に *-n vs. -d* を取り上げたが、正にこうした接辞を既に語幹に内包しているような時制・アスペクト系の助動詞 *tan-* “present continuous” や *ken-* “preterite” など、そうした事態を把握できないと極めて不可解な現象を呈するようになる。上で議論した問題から想像できることだが、*tan-a-e vs. *tan-eq-e* のペアで後者は二重に非文法的になる：ひとつには、*tan-* は既に *-n vs. -d* のメカニズムによって [-transitive] とマークされていること、¹⁹⁾ そして二つ目には *-e(q)* は “transitive marker” にこそなれ、決して「自動詞マーカ―」とはなり得ないからである。

本節を締めくくるに当たり、情報価値としてはある種の redundancy を含みながらも、“transitivity”を巡る語彙的対立を形態的に顕在化させる Ablaut バージョンの“語幹拡張子”を、接続法形のまま改めて提示しておきたい：

- (31) a. Mangra Ranci *sen -oq-φ-e*. ‘Mangra would go to Ranchi.’ (cf. 30a)
 b. Mangra manzdi *jom-eq-φ-e*. ‘Mangra would eat rice.’ (cf. 30b)

藤井 (2009) でも論じたところだが、これが indicative marker の *-a* をとって直説法化すると、特に語彙的に内在化されている [±transitive] が顕著な動詞語彙ほど、*-oq vs. -eq* が脱落しやすい傾向を示すこと、既に暗示したとおりである。ただそれにしても、“意味構造”的に内在化した [±transitive] の対立を改めて形態的に顕在化するための複合的メカニズムを準備・構造化している点で、ムンダ語の「動詞語彙」という存在は、他言語で一般的な「品詞」と称されるカテゴリーに比べ、極めて「文法のカテゴリー」に近い、という実態が浮き彫りになったことの意義は決して小さくない。

4. “Transitivity” の概念に絡み、ムンダ語統辞現象が示す幾多の“謎”

4.1. ムンダ語ナグリ方言と統辞現象の“謎” 前節では、動詞語彙に関する意味的な“内部構造”に位置付けられている、いわゆる“transitivity”を巡る対立 [±transitive] が、ムンダ語に於いては個々の動詞語彙のレベルでまで形態的に顕在化させる、体系的メカニズムが備わっている実態を明らかにした。実際、こうした実態を踏まえない限り、動詞語彙の“transitivity”に絡む幾多の規則性は、表面的な観察では単なる idiosyncrasy としか映らない：

- (32) a. 幾つかの自動詞語彙は何故、*-og* で語幹が拡張されたバリエーションを持つのか？
 b. 幾つかの他動詞語彙は何故、散発的に *-e(q)* で語幹を拡張する形態で現われるのか？
 c. 助動詞の多くは何故、“indicative marker” の *-a* を脱落させるだけでは接続法形が導けないのか？

ここで重要なのは、ムンダ語に於ける“transitivity”を巡る対立を形態的にマークするシステムとしては、*-n vs. -d* と *-o(q) vs. -e(q)* という、少なくとも二つのメカニズムが構築されている、という点なのだ。しかしながら、上の (32a-b) で挙げた問題以外にも、ムンダ語には“transitivity”を巡って様々な“謎”が存在し、その多くが未だ解明されていない、という状況にある。以下ではその幾つかに焦点を当て、最終的に「“Transitivity”とは何か?」という一般言語学的議論の進展に資するための基盤を構築したい。

まずは、(32a-c) 以外で“transitivity”に絡む諸問題を簡単に整理しておこう。本稿で全てを取り上げるわけにはいかないが、ザッと数え上げただけでも:

- (33) a. *tan-* (「現在進行相」), *tain-*, (「過去進行相」), *ken-* (「単純過去時制」) は *-n-* を含むのに何故、他動詞構造をも許容するのか? (cf. 藤井 2009)
- b. *tan-* (「現在進行相」) は何故、未来を指し示す時間表現と共起するのか?
- c. 現在時制では他動詞構造を許容していた *tan-* (「現在進行相」) が何故、未来を表わす表現と共に用いられると他動詞構造を拒絶するのか?

など数点が挙げられる。このうち、(33a) は既に藤井 (2009) で包括的に扱っており、ここで改めて取り上げることはしない。差し当たっての“結論”としては、「確かに目的語をとってはいるが、焦点はあくまでも主語の方に当たっており、全体としてはある種の“自動詞構文”となっている」といったところで十分であろう。

4.2. 「現在進行相」と“未来時制” (33b) と (33c) は互いに関連していることもあり、以下でその“謎解き”に挑戦したいので、まず端的に問題点を指摘しておきたい:

ムンダ語ナグリ方言に於いては、「単純現在」は例えば *rojdin* ‘every day’ のような表現と共に「恒常的に繰り返される動作」などを表現するのに加え、英語などと違って現在を端的に表わす *naqa* ‘right now, from now on’ と未来を表わす、例えば *gapa* ‘tomorrow’ などとも問題なく共起できる:

- (34) a. Mangra **rojdin** manzdi *jomae*. ‘Mangra *eats* rice **every day**.’
 b. Mangra **naqa** manzdi *jomae*. ‘Mangra **will eat** rice **right now**.’
 c. Mangra **gapa** manzdi *jomae*. ‘Mangra **will eat** rice **tomorrow**.’

要するに、ムンダ語はドイツ語やフランス語と同様、時制としては「未来」と「現在」を区分しない言語、ということになるわけだ。²⁰⁾

ところが、時制・アスペクトの助動詞 *tan-* を用いる、いわゆる「現在進行相」に於いては、次の (35b) が示すように何故か、未来を表わす時間表現とは共起できなくなってしまう:

- (35) a. Mangra **naqa** manzdi *jom tanae*. ‘Mangra is eating rice right now.’ (cf. 35b, 34a-c)
 b. *Mangra **gapa** manzdi *jom tanae*. (‘Mangra will be eating rice tom.’ [cf.35a, 34a-c])

このことはつまり、このアスペクト（「現在進行相」）に限って突如、「現在」と「未来」が時制的に（要するに「文法のカテゴリー」として）対立するようになる、ということなのか？

- (36) a. Mangra **naqa** manzdi *jomae*. ‘Mangra will eat rice tomorrow.’ (= 34b; cf. 36b)
 b. *Mangra **gapa** manzdi *jom tanae*. (‘Mangra will be eating rice tom.’ [= 35b; cf. 36a])

ここでは確かに他動詞の *jom* ‘to eat’ を使っているが、藤井 (2009) でも既に明らかにしているように、現在進行相の *tan-* は他動詞をも許容し、構文全体としては「自動詞構造化」しているわけで、実際、現在形の (35a) もそうした条件を満たすことによって文法性を確保しているものと理解できる。それなのに何故、「未来進行相」は不可能なのか？ これまでのデータ比較だけではおそらく、説得力のある結論は導けまい。

しかしながら、*senog* ‘to go’ のような自動詞を使うと、状況はだいぶ変わってくる。次の例を見て欲しい：

- (37) a. Mangra **naqa** Ranci *senog tanae*. ‘Mangra is on the way to Ranchi.’ (cf. 37b)
 b. Mangra **gapa** Ranci *senog tanae*. ‘Mangra is going to Ranchi tom.’ (cf. 37a)

これなら何と、*tan-* は *gapa* ‘tomorrow’ との共起が可能となるのである。自動詞の *senog* ‘to go’ と他動詞 *jom* ‘to eat’ のどこが違うのか？

- (38) a. Mangra **gapa** Ranci *senog tanae*. ‘Mangra is going to Ranchi tom.’ (=37b; cf. 38b)
 b. *Mangra **gapa** manzdi *jom tanae*. (‘Mangra is going to Ranchi tom.’ [= 36b; cf. 38a])

もちろんのこと、英語の *to go to eat* や *to go and eat* のように (38b) にも *sen* ‘to go’ を挿入し、「食へに行く」みたいな言い方にすれば問題は取りあえずなくなりはず：

- (39) a. Mangra **naqa** manzdi *jom tanae*. ‘Mangra is eating rice right now.’ (cf. 39b, 37b)
 b. Mangra **gapa** manzdi *jom sen tanae*. ‘Mangra is going to eat rice tom.’ (cf. 39a, 37b)

しかし、これでは他動詞の *jom* ‘to eat’ を *tan-* で展開したことにはならず、本動詞の意味的カテゴリーは *sen* ‘to go’ が提供していることになって、結局は (38a) と同じ扱いになるわけだから、これが *tan-* と共起するのはむしろ当然だ。言うまでもなく、これでは問題の解決に

はならない。

4.3. 「未来表現」に於けるアスペクトとモダリティー　ここで若干、気になることがある。それは、(37b)の意識が‘... is going to ...’となっていて、(37a)が示す現在形の「進行相」とは様相がちがっていることだ。この「進行相」というアスペクトを時間表現 *gapa* ‘tomorrow’の表わす時点にスライドさせれば、英語ではさしずめ(37a)に倣って‘... will be on the way ...’とするか、もう少し無味乾燥に‘... will be going/walking...’のどちらかくらいが妥当であって、‘... is going to ...’は若干、場違いである。これだと普通、「予定」「計画」「意図」などの、ある種の「話法表現」になってしまうからだ。それとも、ムンダ語は「未来進行相」を持たない言語なのか?あるいは少なくとも、*tan-*を(38a)のように未来を表わす時間表現と共に使うと本当に英語の *be going to* に対応するような、一種の「話法表現」となってしまうのか?もしそうだとすると、(37b)が文法的に成り立たないのには、これまで予想していたものと全く別の要因があることになるかも知れなくなる。まずは構文上、問題のない(37b)の適切な意味・機能を確認するのが先決である。

インフォーマントに抛れば、(37b)に極めて近い意味を持つのが、助動詞 *ko-*を使った、次のような文だという:

- (40) a. Mangra **gapa** Ranci *senog* **ta**nae. ‘Mangra **is going** to Ranchi tom.’ (= 37b; cf. 40b)
 b. Mangra **gapa** Ranci *senog* **ko**ae. ‘Mangra **shall go** to Ranchi tom.’ (cf. 37b, 40a)

だとすれば、未来を表わす時間表現 *gapa* ‘tomorrow’を伴う(40a)と組み合わせられる *tan-*は「進行」を表わす助動詞などではもはやなく、一種の「話法の助動詞」ということになるわけだ。

では、「予定」や「計画」などを本動詞 *jom* ‘to eat’でどう表わすべきか?どんな助動詞を使うことになるのか?まずは明確に「話法」を意識し、(40b)との対比を見てみたい:

- (41) a. Mangra **gapa** Ranci *senog* **ko**ae. ‘Mangra **shall go** to Ranchi tom.’ (= 40b; cf. 41b)
 b. Mangra **gapa** manzdi *jom* **ke**ae. ‘Mangra **shall eat** tom.’ (cf. 41a)

要注意は自動詞 *senog* ‘to go’の時の話法の助動詞 *ko-*が *ke-*へと ablaut する点。そして、この *ke-*に類似の助動詞を探ることとなる...。そう、それは *taq-*だ:

- (42) a. Mangra **gapa** manzdi *jom* **ke**ae. ‘Mangra **shall eat** rice tom.’ (= 41b; cf. 42b)
 b. Mangra **gapa** manzdi *jom* **taq**ae. ‘Mangra **is going to eat** rice tom.’ (cf. 42a)

ここに至って初めて、何故 **jom tanae* ('is going to eat') が非文法的にしかならなかったかが浮き彫りになる。そう、「話法の助動詞」としての *tan-* は [-transitive] を体現する *-n-* のせいで自動詞としか共起できなかつたのである:

- (43) a. *Mangra **gapa** manzdi *jom tanae*. ('Mangra is going to eat rice tom.' [= 38b; cf. 43b])
 b. Mangra **gapa** manzdi *jom taqae*. ('Mangra is going to eat rice tom.' (= 42a; cf. 43a))

そして、「話法の助動詞」として自動詞の *tan-* 'to be going to' に対立するのは、*-n-* を *-q-* で入れ換えた *taq-* 'to be going to' という形態であった。

これでようやく、「話法の助動詞」として自動詞・他動詞の両形が揃うことになる。次の二文だ:

- (44) a. Mangra **gapa** Ranci *senog tanae*. ('Mangra is going to Ranchi tom.' (= 40a; cf. 44b))
 b. Mangra **gapa** manzdi *jom taqae*. ('Mangra is going to eat rice tom.' (= 43b; cf. 44a))

“transitivity” を巡る対立 [±transitive] を形態的に体現するのは、この「話法の助動詞」の場合、*-n-* vs. *-q-* となる。上で見てきた一般的な *-n-* vs. *-d-* からすると若干、不規則ではあるが、*tad-* がアスペクトの助動詞として既に負荷が掛かっている以上、致し方あるまい。また実際、同様の形態的対立は “terminative” の助動詞 *len-* vs. *laq-* でパラダイムを為している:

- (45) a. Mangra **hola** Ranci *senog lenae*. ('Mangra *went* to Ranchi yest.' (= 21a; cf. 45b))
 b. Mangra **hola** manzdi *jom laqae*. ('Mangra *ate* rice yesterday.' (= 21b; cf. 45a))

何れにしてもムンダ語に於いては、動詞語彙に内在化された“意味構造”に位置付けられた“transitivity”を巡る対立 [±transitive] は、極めて首尾一貫として形態的なサポートを求めることが判る。ムンダ語に於ける“transitivity”を「文法のカテゴリー」に準ずるものとして把握する所以である。

5. 展望: “Transitivity” の概念とその「相対性」

伝統文法で一般に行なわれる言語表現の二分法「語彙」vs.「文法のカテゴリー」に出発点を求め、それぞれの表現グループが“transitivity”の概念と如何なる接点を持つかについて整理するのが本稿が取り組んだ最初の課題だったが、その作業を通じて我々に“Transitivity”は第一義的には語彙に内在する“意味構造”に位置付けられる」という認識をもたらすところ

となった（第一節）。その意味では，“transitivity”は意味論的には正に「語彙」的カテゴリーであって、典型的な文法のカテゴリーとは捉えにくい。

本稿では続いて、動詞語彙の“意味構造”に内在化する“transitivity”の概念を、現代ムンダ語ナグリ方言の統辞体系が如何なるメカニズムで顕在化させているかについて検証した（第二節）。このプロセスで浮き彫りになったのは、いわゆる“transitivity”の概念を巡り、この言語は動詞語彙の意味的“内部構造”に対し、統辞体系を通じて極めて組織的に関与し、一般には一言語の言語表現を二分し、形態論的に見るとある程度の体系的独立性を担保しているように考えられている「語彙」と「文法のカテゴリー」両者を有機的に結びつけるような仕組みで機能している、という実態だった（第三節）。

“Transitivity”の概念に絡み、ムンダ語の類型論的位置付けに関して最も重要な認識はおそらく、「動詞語彙は基本的に全て neutral であり、文中で用いられる動詞定形は語幹に対して *-o(q)/-e(e)* が形態的に接辞されることで“transitivity”が確定する」という、極めて生産的なプロセスである。そして、ムンダ語に関しては“transitivity”をこのように位置付けて初めて理論的に把握できる統辞現象が極めて多いことを暗示した上で、その幾つかのデモンストレーションを試みた（第四節）。

本稿では個別の現象として網羅的には扱えなかったが、既に藤井(2009, 09a, 10)でも示しているように、現代ムンダ語（ナグリ方言）では“transitivity”に関しても旧来の概念規定では把握できない、数多くの言語現象が観察されている。この概念もやはり、徹底した相対化が迫られる印象を強くするばかりである (cf. HOPPER/THOMPSON 1980)。

いわゆる「言語を通しての世界観・外界受容」を問題とするとき、決定的な意味合いを持つのは第一義的にはやはり「語彙」ということになる。しかしながら、言語記号としての個々の語彙が構造化された意味論的体系を持っていること自体、十分に認識されながらも、いわゆる「文法のカテゴリー」に比べるとその体系性はどうしても顕在化させにくいという恨みがある。

その意味では、両方の表現群が極めて緻密に、有機的な関係性を明示できる高い可能性を秘めたムンダ語等の個別言語に関する研究は、一般言語学的な視点からも十分に期待に沿える結果を生み出せる対象と考えていい。“Transitivity”に限らず、今後とも弱小言語からの研究成果も陸続と生み出されることを期したい。

注

- 1) 具体的には、例えば「時制」と呼ばれる文法のカテゴリーは、そのサブ・カテゴリーとして「現在」や「過去」「未来」*etc. etc.*、「格」であれば「主格」や「対格」「属格」...といった個々の“値”という具合である。
- 2) 当然ながら、いわゆる“意味”も文字通り異なっている。
- 3) このことはもちろんのこと、現代言語学的な意味での「形態論」的認識が育っていなかった、例え

ば18世紀以前の「規範文法」の時代には、Lat. *amicus* Lat. *amicum* が“別単語”として捉えられていた、ということの意味するわけではない。伝統文法でも「パラダイム」という概念はキチンと認識されていて、Lat. *amicum* が Lat. *amicus* の“別形”（しかも、前者の“屈折”した語形）と捉えられていたことは、「活用」という概念が規範文法でも既に明確に位置付けられていた事実からも容易に窺える。

- 4) もちろんのこと、ここでは“学術的”な見地からそうした“教育的配慮”の非妥当性を指摘するのが目的ではない。実際、以下の本文でも示すように、対象が「語彙」である関係で問題の“意味構造”を的確に記述するのは言語学的にも極めて困難な場合も多い。
- 5) 要するに、特に「語彙」のレベルでは「文法のカテゴリー」とは違い、我々人間は言語の違いを越えて“ほとんどユニバーサルに意思疎通が可能”なのであって、判断基準を“semantic criteria”に採ることで、その先は更なる分析なしで説得力を生む、という一種の「迷信」「妄信」が独り歩きしている、ということなのだ。実際、例えば GREENBERG (1963/66: 74) にしても、自らの *statistic universals* を正当化するための根拠として盛んに“semantic phenomena”“on semantic grounds”を連発するが、実質的に「何故、そうした意味論的概念を引くことが説得力を生むのか?」という素朴な疑問には全く答えようとはしない。ここではしかし、この問題をこれ以上、詮索することはしない。
- 6) ちろんのこと、〈開く〉の場合は自動詞と他動詞は Homophone となる。
- 7) Ger. *offen* は確かにある種の“自動詞”で他動詞 Ger. *öffnen* は形態的にこれから派生しては明らかだが、そもそも“to be open”という意味の形容詞であって、やはり「*öffnen*の自動詞形」と理解するのは不適切である。その意味でも、*öffnen* は *offen* から造語されたもの、すなわち“別語彙”なのである。
- 8) 実質的に、他動詞の Ger. *öffnen* に対応する自動詞形はドイツ語には存在しない。前掲注でも示した通り、Ger. *offen* は形容詞であり、Ger. *öffnen* の“自動詞形”ではないからだ。
- 9) 周知のように (cf. 藤井 2010; 藤井 2009 etc.)、ムンダ語の“agreement”は当該名詞表現の“animacy”によって trigger され、“subject agreement”をマークする「人称語尾」も主語が [+animate] を示す時に限って対応する接辞が現われる。
- 10) 藤井 (2009) では全体として、このレベルに於ける「“agreement”の脱落現象」もある種の“transitivity”の欠如」という解釈を示したが、ここでは取りあえず「目的語の存在が理論的にも想定できる場合は他動詞構造」という認識を受け入れ、この問題をこれ以上、追求することはしない。
- 11) 英語に於いて目的語の有無しか [±transitive] の対立をマークできないケースとしては、上掲の (2a-b) が示す *to open* のような「自動詞」「他動詞」が homophone になっているペアや、(5a-b) の *to graduate* や *to eat* (通常他動詞とは違い、自動詞としては「食事する」といった意味合いになる) のように、自動詞と他動詞では語彙の意味内容に少なからぬ異同があるような場合とが考えられる。
- 12) 逆に言えば、こうした形態的マーキングが存在しなかったとすれば、目的語を脱落させた他動詞用法は、対応する自動詞用法と意味的に弁別することができない、ということになる。
- 13) 具体的には、ムンダ族の主要部分が居住する東インド Jharkhand 州の州都。
- 14) いわゆる「単純過去」だが、“terminative”との機能的“棲み分け”のような時制論的な問題にはここでは踏み込まない。また、preterite の *ken-* は他動詞とも共起するが、この問題については藤井 (2009) を参照されたい。
- 15) いわゆる“ingressive”は動作や状態の「開始」をマークすることから、ムンダ語の「アスペクト」に関する筆者のこれまでの分析からすれば、[-transitive] の *jan-* に対立するのは理論的には *lad-* になるものと思われる。しかしながら、筆者のインフォーマントに抛るとナグリ方言では *lad-* は現実には (24a) で示す *tan-* に対立して一種の“present continuous”を構成し、通常は発話時にはまだ完了していない“持続”のアスペクトをマークするのだという。
- 16) こうした母音交替は印欧諸語に於いて造語法のメカニズムとなっている“Ablaut”と呼ばれる現象を彷彿とさせる (cf. 藤井 2009a)。

- 17) 動詞語幹が *-i-* で終わっているため, *urui-i-a* となるべきところを綴りの上では agreement marker の方の *-i* を *-y* として同母音字の連続を避けている。
- 18) 一般に「直説法」と「接続法」を対比させると前者の方が unmarked, 後者が marked と考えられることから後者は前者に何らかの文法的オペレーションを施した, 一種の“派生形”と理解できるので, 本文のような記述にしたが, ムンダ語に於いても両者が同じ構図を描いているか若干, 疑わしい。しかしここでは, この問題をこれ以上は追求しないことにしたい。
- 19) しかしだからと言って, *-n* を *-d* で置き換えれば“他動詞形”が導けるわけでは必ずしもない。実際, *ked-* は確かに *ken-* に対応する他動詞形となるが, *tad-* は [+transitive] を前提とするが, マークするアスペクトは *tan-* と同じではない。ここではただ, これ以上, この問題を追及することはしない。
- 20) この点に関しては, 日本語も基本的に同様である。いわゆる〈～するだろう〉といった表現は基本的に「推量」という話法の問題であって, 時制とは直接, 関係ない。その証拠に, 〈だろう〉という表現は〈今頃〉など, 「発話時」「現在」を表わす時間表現とも基本的に問題なく共起できる。

参考文献

- FILMORE, Charles J. (1968), 'The Case for Case', in: BACH/HARMS, eds., *Universals in Linguistic Theory*, New York: Holt, Rinehart & Winston 1968, pp. 1-88.
- HOPPER, Paul/Sandra THOMPSON (1980), 'Transitivity in Grammar and Discourse', in: *Language* 56, pp. 251-299.
- OSADA, Toshiaki (1992), *A Reference Grammar of Mundari*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 長田 俊樹 (2001), 『ムンダ語教本』, 東京: 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 亀井 孝/河野 六郎/千野 栄一 eds. (1992), 『言語学大辞典』 Vol. 4 (世界言語編 下-2), 東京: 三省堂。
- 藤井 文男 (2008), 「現代ムンダ語口語文法研究上の諸問題」, in: 『人文コミュニケーション学科論集』 4, pp. 119-139.
- (2009), 「Animacy と『他動詞性』——ムンダ語の他動詞構造に於ける Agreement の欠落現象が物語るもの——」, in: 茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』 6, pp. 43-67.
- (2009a), 「“Ablaut” は印欧諸語の専売特許なのか?! ——ムンダ語に於ける「自動詞 vs. 他動詞」の弁別性とその表示メカニズムについて——」, in: 茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』 7, pp. 121-143.
- (2010), 「“品詞” とその『構造的意味』——ムンダ語に於ける『非人称表現』に見る“動詞” vs. 『形容詞的語彙の対立』——」, in: 茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』 9, pp. 51-81.
- 三上 直光 (1992), 「ムンダー諸語」, in: 亀井 *et al.* (1992), pp. 388-391.
- (1992), 「ムンダ語」, in: 亀井 *et al.* (1992), pp. 391-393.
- (1992), 「ムンダリーグループ」, in: 亀井 *et al.* (1992), p. 393.